**質問1）**帝国の他の地域のムスリム・統合に際して特に抵抗した地域のムスリムや、帝国外のムスリムからはどのような評価をされたのでしょうか。

**質問2）**近代以降のトルコ共和国は、トルコ民族主義を掲げ・かつ中央ユーラシアを含めたチュルク系諸国の盟主の自負を持っているように見受けられますが、

そのトルコ共和国では、民族意識だけでなく旧ソ連としてのアイデンティティを色濃く残す（ロシアとの“近さ”も残す）カザフやアゼルといった中央ユーラシア諸国の（例えばチュルク系諸国会議への）反応や外交は、どのように受け止められるのでしょうか。また、チュルクの中では特にアゼルと関係が近しいように見えますが、トルコとして特に接近したい国はどの国なのでしょうか。

**長縄先生のご回答**

とくに前半のご質問は、むしろ他のムスリム地域の専門家が取り組むに値する課題です。ただ言えることは、19世紀前半に激しい抵抗を行った北コーカサスの山岳民やカザフ草原の遊牧民は、19世紀末から20世紀初頭にはヴォルガ・ウラル地域のムスリムと宗教教育や経済の面で深い結びつきを持つようになったということです。北コーカサスのダゲスタンに現在まで伝わり、当地のイスラーム権威に承認されているイスラーム神秘主義の系譜には、3,4名のヴォルガ・ウラル地域の師匠の名前が認められます。また、カザフ草原はロシア帝国に統合されることで、家畜やその製品を売る市場を拡大することができたわけで、その取引にはタタール人が積極的に参入し、多くのタタール人ウラマーがカザフ人の間で教鞭を取りました。もちろん、ロシアによく統合されたムスリムに対する不信感は根強かったとは思いますが（カザフ人の間ではタタール人の狡猾さを難じる詩も作られました）、帝国という空間がムスリムの新しい紐帯を生み出した側面は軽視してはならないと思います。

　帝国外のムスリムからの評価ということでは、イスラーム改革思想の越境的な流通に貢献したラシード・リダーの『マナール』誌を挙げるのがよいかと思います。講演の中でも述べましたように、20世紀初頭には少なからぬ数の学生が、ヴォルガ・ウラル地域からカイロのアズハル学院で学んでいました。リダーは、こうした留学生からの伝聞だけでなくロシアの購読者からも手紙を得ていたようで、とりわけヴォルガ・ウラル地域からの言葉を頼りに、ロシア全体のムスリムの状況を把握しようとしていました。とりわけ1905年革命で台頭する急進的な若者に共感していたと言われます。配布資料の参考文献にも記載しましたRoy Bar Sadeh氏の論文を読むことをお勧めします。

**今井先生のご回答**

　トルコとして南コーカサスおよび中央アジアの中で最も信頼している国はアゼルバイジャンになります。これはカディルハス大学が毎年実施している世論調査などでも明らかです。アゼルバイジャン語はトルコ語に最も近く、コミュニケーションも取りやすいですし、多くのアゼルバイジャン人がトルコに留学生としてきています。また、歴史的にアルメニアに対する敵対心を共有してきました。

　1990年代の失敗からトルコはテュルク系の民族が住む諸国家には限定的な影響力しか及ぼせないとわかっていると思います。今はロシアが国際社会で窮地に陥っているためにその合間を縫って影響力の行使に積極的ですが、中国の影響力も浸透しているので、盟主になりたいというほどの強い意欲はトルコ政府も持っていないのではないかと思います。